

史料との幸運な出会い

米 川 伸 一

歴史研究者たらんと志して本学の門をくぐって30有余年、本大学に奉職してから20余年を数える。入学して間もなく、小平で「経済史概論」を講じておられた増田四郎先生の教えを受け、史料とつきあう法を身をもって教えられた。今でも論文の引用はすべて典拠を確かめ、史料（或いは資料）のあるところへは海外にも丹念に収集に行くという歴史研究者の基本はこの時に学んだものである。

それにしても、わが国の歴史研究はここ一世代のうちに、想像以上に進歩した。今ではごく当り前になってしまったマニュスクリプトに基づく研究成果などは、私のかけだしの時代には想像もつかなかったものである。今でも思い出すが、大学に入って間もなくイギリスに起った1381年の農民一揆と卒論で取組もうと考えて書物を集め始めたが、当時これを扱った研究書では必須と考えられていた Ch. Petit-Dutaillis, *Le Soulèvement des travailleurs d'Angleterre en 1381*, 1898. がどうしても日本では入手出来なかった（数年してから東大・社会科学研究所が所蔵した）。そのため、このプランは当面放棄せざるを得なかった。

何を卒論の対象とすべきか迷いに迷った。私は今でも鮮明に記憶しているのだが、三年の夏休み、がらんとした人気のない大学の閲覧室で Victoria County History の、正確には忘れてしまったが、恐らくハーフォードシャの一冊を当てもなく繙いていた時、眼に飛び込んできたのが「週市」と「年市」の記述だった。当時は大塚史学の全盛期で「局地的市場理論」が注目を浴びていた。私は、この記述からこれを摘出し得る原史料がチャーター・ロウルズ (Charter Rolls) やパテント・ロウルズ (Patent Rolls) クロウズ・ロウルズ (Close Rolls) など一連の史料であることを盗み取り、すぐにこれらの史料を紀伊国屋書店に注文した。

恐らく百冊に達するという当時としては大変なしろものだった。ここから千を数える週市開設の「特許状」を摘出し、V.C.H.の州別の地図で週市の開かれた町や村落を識別し、地図上に再現するという作業を基礎にして提出されたのが、私の卒論「中世イギリスにおける『農村市場』の成立」であった。先生の推薦によってこれは間もなく『社会経済史学』に掲載され、幸い学界で温かく迎えられたが、これはとにもかくにも、この論文が膨大な史料に基づいたオリジナルなもの、つまり欧米の成果の紹介やその着色ではなかったことにあるのだろう。

史料との幸運な出会いとは、しばしば言われるものであるが、私はこれが真実であると思う。あれから30年を経たが、私はそれ以上に幸運な史料との出会いを経験しなかったと思う。しかし、歴史研究の出発点において、このような幸運な出会いを経験することによって、私は原史料主義とオリジナルな作品を書くことを当然と看做し、かつそれに対する自信を持つことが出来たことを、深く感謝している。そして、今では全く研究領域が変ってしまって接することも稀になった当時の先学（その殆どが一橋とは係わりのない研究者であった）を、当時の学問的雰囲気とともに懐しく想い出すのである。

私の学位請求論文は、「中近世ノーフォクの社会経済発展」というタイトルで書かれた。今の研究領域から考えるとおおよそ想像もつかないものである。これは10年以上も経った昭和47年に『イギリス地域史研究序説』として未来社から出版されたが、今度本書が生協の協賛のもとで復刊されることを知って、筆舌に尽くせない喜びを味わうことが出来た。本書の初版を売り尽くすなど考えられもしなかったが、これは恐らく出版後数年経って湧き起った「地域」ブームと係わりがあるとしか思えない。

さきの処女論文が中世末期のイングランドの横断面であるとしたら、大学院の5年間で手懸けたものは、ノーフォクというわが国で言えば県にでも相当する地域の、約500年の縦断面である。処女論文でいささか自信過剰に落ち入っていたのであろう。社会・経済を構成する諸要因とその発展を一つの具体的な地域で実証的に跡付けようとしたのが、この当時でも無謀とも言える研究の狙いであった。全く別な表現を使えば、研究者集団の全く異なる英国中世と英国近世を一つに結び合わせようとしたのである。手懸りは R. H. トーニィが名著『16世紀イングランドの農村問題』のなかで引用しているノーフォクの作者不明の地方史料から与えられた。この史料の語るインクロウジャ地帯とオープン・フィールド地帯との対照と11世紀に記されたノーフォク内部の対照的社会・経済構造との間に或る相関関係が見られないか、というのがそもそものアイデアであった。

ともあれ、ここでの主題は作品の内容ではなく史料であるが、この学位論文執筆の際はノーフォクに関するあらゆる史料・論文を渉獵した。外国の大学に提出された Ph. D (学位論文) をマイクロ・フィルムで相当数利用したが、これも西洋史研究ではまだ珍しい頃であった。ともかく11世紀のドゥムズディ調査から市民革命までの流れを繋がねばならないのだが、これは一人の研究者が一生かかっても出来るものではない。あとになってノリッジ (Norwich) のイースト・アングリア大学 (University of East Anglia) に滞在して、論文の一部を英文にまとめる機会があったが、その時、当州の一時代を対象にして悠々と作品の完成に取組む多くの学徒に接して愕然としたものである。従って、私の完成した作品の密度はおおよそ想像がつくというものであろう。

利用されたものは、11世紀はドゥムズディ・ブック、12・3世紀はラテン語の土地台帳、15・16世紀は近世英語の史料であるが、殆どすべてが印刷された史料であった。「ノーフォク史料協会」「ノーフォク考古学協会」の膨大な出版物が大いに役に立ったのはこの時であった。この学位論文をとにかく一本の書物にまとめる気になったのは、既述の書物の序文にもあるように、オックスフ

ォード大学の J. サースク博士の業績に触発されたからに他ならない。私のまずい英文のペーパーに手を加えて下さって、ヨーロッパの学界誌に投稿するように励ましてくれたのも彼女であった。

こんなわけで、学位論文執筆に際しての「史料との幸運な出会い」は、強いて言えば、実はサースク博士も(R. H. トーニィの高弟でありながら)見逃していた17世紀市民革命直前に記されたノーフォクの一地方史料(これは既述「ノーフォク考古学協会紀要」第20巻に収録されている)ということになるであろう。

商学部に移って経営史研究に手を染めるようになって以来、私の研究対象は何度か大きく変わった。経営史学史に取り組みながら「イギリス近代社会と土地問題」を追い続け、何とか今まで通念となっていたイギリス像から「もう一つのイギリス像」、別の表現を使えばイギリス経営風土の形成史を自分なりに構築することが出来たが、この時史的に最も役に立ったのが、「農業総合研究所」が当時購入して間もなかった「エイメリ文庫」であった。

同文庫の目録によれば、エイメリ(G. D. Amery)はオックスフォード大学講師とのみ記されているが、恐らく彼も往時のイギリスを捲きこんだ「土地問題」the Land Question に深い関心を寄せていたに違いない。だが、インクロウジャ研究がこの「土地問題」に触発され、R. H. トーニィの学問的出発もまたこの「土地問題」と係わっていたことを、私はうかつにもこの研究に埋没するまで気付いていなかった。この「エイメリ文庫」の白眉は、私に言わしむれば、19世紀末に発刊された「土地問題」のパンフレット約100篇であり、それは製本されて6冊にまとめられ同文庫に収納されている(No. 1649~1654)。そこには土地国有化論者 A. J. Ogilvy とかインクロウジャ研究史上名を残した I. S. Leadam や E. Gay その他当時の論客の多くの名が見られる。

このような収集者が学問的に著名であるというより、内容に特色がある文庫は本学にも若干あるであろうが、私が特にここで触れたいのは「外池文庫」である。この文庫は、イギリスの協同組合関係のコレクションとしては、恐らくイギリスのどの図書館にも引けをとらないだろう。周知のように、ロンドン・スクールのウェップ・コレクションはウェップ夫妻が収集した協同組合関係の文献が豊富に収録されているが、この関係だけを拾えば多分「外池文庫」に勝るものではない。私は綿業企業経営の国際比較の研究に研究対象を移してからこの文庫を大いに利用させていただいた。そこで、どうしても触れておかねばならないのが、当文庫に所蔵されている少数のマニュスクリプトのうちに含まれる、かの「ロッチディル協同組合」Rochdale Equitable Co-operative Society の形成時からの議事録その他その歴史を綴ったマニュスクリプトである(Toike, G. 1)。筆者は不明だが複数、恐らく20世紀に入ってオリジナルを処分する際、或いは紛失を恐れてコピーしたものであろう。全く何のタイトルもない鉛筆で記されたノート9冊分の記録は、労働者の筆跡を想わせる。最初鉛筆で書かれたものは後にペンでなぞられてある。恐らく判読出来なくなるのを恐れたに違いない。別にこのノート6冊分に関してはタイプしたものが同文庫に含まれている(Toike, EC. 79)。まずこのマニュスクリプトを偽物と見做す根拠はとりあえずない。唯夫々のノートは同一筆跡であることから後に複書したものであることは間違いない。一部の記述は戦間期に及んでいる。史料のあり方から言えることは、要するに、ロッチディル協同組合の創立当初の史料が複書にもせよまとめられてここにある、ということである。とすれば、その史料価値は絶大と言うべきであろう。何しろ当組合こそ生活協同組合の母胎なのだから。この議事録の存在は他の研究者にも知られているのだろうか。

この他10年程前にロンドンに長期滞在した時には多くの史料(この時期に手に触れた記録はむし

る資料と記すべきだろうか)との出会いがあった。なかでも企業登録局 (Company Registration Office) と古文書館 (Public Record Office) が所蔵する通常カンパニー・ファイルは忘れられない。同種の印度の資料を閲覧のためボンベイの企業登録局を訪れた時には、アジ研の畏友にしみ退治の薬を携帯するよう忠告された。コピー機などあるはずもなく、苦勞して資料を読んだ想い出これに勝ることは、今後もあるまい。しかし、卒論のテーマに途方に暮れていた時の、あの一連の国王特許状史料とのめぐり合いに勝る幸運は、再び訪れようもなかった。

(一橋大学商学部教授)